
ファンタジー的な物語（魔法もあるよ！）

you

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファンタジー的な物語（魔法もあるよ！）

【Nコード】

N9119R

【作者名】

you

【あらすじ】

何処にでもいる平凡（？）な高校生、桐島葵。

今日もいつも通りの学生生活を送る予定のハズが…

剣あり魔法ありのすべくたくるあどべんちゃー！（嘘）

さよならなら日常。急展開すぎていじめんなさい (前書き)

ノリと勢いで描いてしまった。

後悔は死ぬほどしている

誤字脱字、文章構成などなど。

壊滅的に変だと思われますので、

ビシバシ突っ込んでくださるとありがたいです。

さよならなら日常。急展開すぎて「めんなさい

ジリリリリリリ！

けたたましく目覚ましの音が鳴り響く。

<ふぁー、…もう朝か>

時計をみると午前7時をさしていた。

俺はそのそと起き上がり、目覚ましを止めると、いつも通り学校へ行く支度を始めた。

そう、いつも通りに…

この時の俺は何気ない日常が過ぎていくだけだと思っていた…

俺の名前は桐島葵。何処にでもいる平凡な高校2年生だ。

まあ周りの奴らは「無敵超人」だのなんだの言っているが、俺はいたって普通だと思っている。

さすがにカツアゲしている不良を蹴って10数メートル先の交番までブツ飛ばしたのはやり過ぎたかもしれないが。

あの時はさすがに逃げたね。不良と一緒にお巡りさんまで気絶してたし。

教室に着くと、とりあえず鞆を机に放り投げた。

<あ、葵！おはよ！おはよ！>

< くんー、おはよーさん >

背中をバシバシ叩かれながら適当に挨拶を返す。

< …相変わらず朝からテンション高いなお前は >

< えー？そんなことないよー？葵が低すぎるのよ！ >

朝からハイテンションで挨拶してくるこいつは「北条咲希」クラス
メイト兼幼なじみだ。

容姿は上の上、成績優秀、髪は黒のロングでまさに大和撫子といっ
た感じだ。

俺も容姿はいいらしく、お似合いだとは言われるが、北条ファンク
ラブから素敵な視線を感じるので学校ではあまり関わらない様にし
ている。

4

< じゃ、俺は例のごとく昼寝してくるわ >

< また！？っていつか、今まだ朝じゃない！あんた何のために学… >

言い終わる前に教室からでて、屋上へ向かう。

いつもつつかかってくるので、あしらう事には慣れたものだ。

< あれ？ >

いつもは開いている屋上へのドアがなぜか今日は閉まっていた。
ためにドアノブを回してみるが、ガチャガチャと音をたてるだけ
で、一向に開く気配はない。

<おかしいな、今まで鍵壊れてて開きっぱだったのに。直した様子もないようだし>

仕方ないなと思いつながら、ここで教室に戻るのも癪なので、強行策にすることでした。

<どっせーい！>

ドガアアアアン！

爆音と共に壁ごとドアが吹き飛んでいく。

<やべ…強く蹴りすぎたか>

少し反省しながら、俺はくるくる回りながら落ちていく元ドアを見つめていた。

<…ん？落ちていく…？>

おかしい、ドアの向こうは屋上のハズだ。

落ちる要素は何処にもない。

恐る恐る下を覗き込んでみると、何も無い真っ白な空間の中で元ドアがくるくると落下している。

<…はい？なんだこれ？>

まあ当然の反応だろう。屋上であるべき場所が消え去っているのだから。

<っ！？>

すると突然何かに引っ張られたように体が動き、白い空間に引きずり込まれた。

<っく！させるかああああ！>

俺は無理やり体をひねり、自分がさっきまで立っていた足場を片手でつかんでぶら下がった。

<あつぶね！もうちよいで落ちるところだっ…！>

ガラツという音をたてて、つかんでいた足場が崩れた。

<うそおおおおー！？>

そして俺は白い空間に落ちていった。

さよらなら日常。急展開すぎてごめんなさい (後書き)

うん、気持ち悪い。

違和感バリバリ

そのうち矛盾とかいっばいでてくるんだろなあ。。。。

生暖かい目で見ていただければ幸いです。

悪夢。なんかもうすいません (前書き)

なんだか読んでくださる方がいるみたいでとてもありがたいです。

見てくださるって思うだけでこんなに違うものなんですねえ(しみじみ)

こんな駄文ですが、どうかよろしくお願いします

あ、ちなみな今回はちょっとグロ入ってますのでお気をつけて。。。

悪夢。なんかもつすいません

<あー、どうすつかねえ>

白い空間の中でポツリと眩く。

ただいま絶賛落下中である。

落ちている感覚はあるのだが、なんせ周りが真っ白なために景色も変わらず、気持ち悪いことこの上ない。

<あ、やべー！納豆期限昨日までだった！もつたいない…>

こんな状況でも家計の心配をしてしまうのは、一人暮らしの悲しい性である。

<なるようになるかあ。…寝よ。>

納豆つてもともと腐ってるから、多少期限すぎても食えるんじゃないかな？などと思いつつながら俺は意識を手放した…。

真っ赤に染まった少年が嗤っていた。

目の前には一組の男女が血まみれで倒れている。

男の方は腕が引き千切られ、目をめぐり出されて絶命していた。

女の方は両腕と右足があらぬ方向に向き、骨が飛び出ている。

<大丈夫、大丈夫よ…？もう怖くないから…>

女は壁に体重を預けながら残った左足でよろよろと立ち上がる。少し離れた所には3つの《人間だったもの》が転がっていた。

<おいで。もう心配ないから>

女はそう言って折れた両腕を必死に前に持ち上げる。優しい笑みを浮かべながら。

少年はフラフラと左右によろけながら、その女の方へ歩いていった。女に抱きつくと、指をたてて背中を引き裂いた。

< あお…い…>

腸を撒き散らしながら呟いた女の声は風にとけて消えていった。

少年はそれを見て嗤っていた。

ただ…嗤っていた。

<っ！はあっ！はあっ！>

全身汗だくになりながら俺は飛び起きた。

<最近あの夢は見てなかったのに！くそっ！>

片手で頭を押さえながら舌打ちをする。

<…ここは何処だ…?>

しばらくして少し落ち着いたため、意識がはっきりしてくる。
冷静になったところで周りを見てみると、見渡す限りの、木、木、
木。

<森…?あれ?学校じゃなかったっけ?あ、そうか。俺落ちてたん
だっけ!>

てへっ と頭に右手を置いてみる。

ぴゅーと音をたてて、冷たい風が走り抜けていった。

悪夢。なんかもうすいません（後書き）

ヤバい。完全に小説が独り歩きを始めました
どうしよう！？この展開は予想外ですよ！？

早速矛盾とかでてきそうだあ。。。

何か気が付かれた方がいらっしやったら是非教えていただきたいです。

初体験。ご都合主義全開っ (前書き)

うあー、これ上手くまとまるのか…?
気持ち悪さしかない今日この頃です。

変な部分等ありましたらご指摘くださると幸いです。

初体験。ご都合主義全開っ

鬱蒼と生い茂る木々の中を俺は歩いていた。

ここに留まっついても何も変わらないと思い、歩き始めたのはいいのだが…

行けども行けども木々の群れしか見えてこない。

さらに先程の夢のせいで、シャツが汗で背中に張り付いて気持ち悪い。

<うあー、べたべたするー。気持ち悪い…早く帰って風呂入りてえ…。>

もう俺の頭のなかは風呂のことではいっぱいである。

<ん？この臭いは…>

しばらく歩いていると、ツンと鼻をつく臭いが漂ってきた。

<まさか温泉！？なんてご都合主義！>

まあ細かいことは気にしない。

えー、痛っ！痛い！石を投げないで！

こほん…とりあえず汗を流したかった俺は温泉に入ることにした。

<ういー、ええ湯加減じゃ。極楽極楽 >

汗を流した後の温泉は格別である。

<…?誰か来た…?>

温泉に入ってくつろいでいると、人の気配がした。
冷静に今の状況を考えてみる。

俺は全裸〓無防備〓危ない人だった場合危険。
まあどんな輩だろうと勝つ自信はあるのだが、極力無駄な体力は使いたくない。

その答えに行き着くと、俺は気配を殺して岩影に隠れた。

<やっと見つけたわ　ここが噂のスリークの森の温泉ね　これで私のお肌もぶるぶるもちもちに…ふふふ　>

<…女?他に気配は…ないみたいだな、一人か>

意外な来訪者に少し驚く。

あの独り言から推測するに、この温泉は美肌効果があるらしい。
だからと言って俺はそうだったことにはまったく興味がないのだが。

<待てよ…、ってことはまさか…!??>

俺が考え終わる前に、女はおもむろに服を脱ぎ始めた。

<ちよ、ちよつと待ったあー!>

ザバァ!とお湯の抵抗を受けながら、俺は勢いよく立ち上がった叫んだ。

幸いにも、女はブラのホックを外すために背中に手を回している状態で止まっていた。

<……………>

女は固まったままこちらを見ている。
それはそうだろう。行きなり叫びながら出ていったのだから、ビツクリもするハズだ。

<.....!??>

女の視線が下に下がったとたん、驚愕の表情を浮かべた。
ん？待てよ...？俺の状況は...。
...やべ、服着てねえ。

<きつ、きゃああああああああっっっ！>

女の大絶叫が森に響いた。

俺は慌てて、両手で下を隠す。

<いや！これは違う...>

<何が違うのよ！この変態！跡形も残さないんだから！「ファイア
ーボール」！>

女が右手をこちらに突き出すと、直径30センチ程度の火の玉がこちらに向かってかなりの勢いで飛んできた。

<っな！？うおおおっ！>

迫ってくる火の玉を、俺は某ハンターさん顔負けの緊急回避でかわす。

<なんだこりゃ！？魔法...!??>

冗談じゃねえぞと思いつながら女を見据える。

<避けるなー！おとなしく消し炭になりなさいよ！>

<アホか！避けるわ！>

無茶を言うものである。

<ちっ、仕方ない>

小さく舌打ちすると、戦闘体勢に入る。

一瞬俺の体がぶれて見えたかと思うと、女の真後ろに立っていた。

<なっ！消え…>

<ていつ！>

すばやく女の首に手刀を入れる。

その一撃で女は意識を手放した。

<おつととと>

倒れる女の体を片手で支える。

<はあ…、どうなってんだこりゃ>

すやすや眠る女を横目に、俺は呆然と立ち尽くしていた。

全裸で

初体験。ご都合主義全開っ (後書き)

無理やりなのは重々承知！

おかしくないですかね？不安で仕方ない…

とりあえず見てくださる方がいる限り頑張ってみます。

和解。ちよつと無理矢理？（前書き）

結構固定して見てくださる方がいらっしやるみたいで、嬉しい限りです

これからも頑張れるだけ頑張ってみますので、よろしくお願い致します

そつえば、タイトルにある魔法が前話でようやく出たと思ったらもう引っ込んだじゃいましたね（汗）

今回は魔法の説明を入れようと思います。

和解。ちよつと無理矢理？

パチパチと木が燃える音が鳴る。

とりあえずたき火をして体を暖めている。

ライター持っててよかったよ、まったく。

辺りはすでに暗く、日が落ちてかなりの時間が立っていた。

<う…ん…？>

<やつと起きたか？>

<…っ！？>

女は目を覚まし、俺の声を聞くと同時に大きく飛び退いた。

<安心しろ、なんもしてねえし、する気もねえよ>

<し、信じられるわけないじゃない！あんな姿見せといて！>

当然ながら俺はもう服を着ている。

<はあ…まず服を着てくれ>

そう言つて女の服をバサツと投げる。

女にはとりあえず学ランを被せていたが、さすがに下着一枚では寒いだろう。

たき火もあるにはあるが、服を着ておくことにこしたことはない。

<……………>

女は警戒しながらも服をとり、こちらを睨みながら着替え始めた。たき火に照らされた女の顔が見える。

改めてみると、かなりの美人である。
軽くウェーブがかかったブロンドの髪に、青い瞳。街中で横を通り
すぎれば思わず振り返って見てしまう程の容姿だ。

<2、3質問したいんだが、いいか？>

ゴロンと横になりながら、女が着替えたのを見計らって声をかけた。

<…何よ>

<まずは…そうだな。ここは何処なんだ？>

<…………>

こちらをじつと睨みながら無言で答える女。
いや、まあ答えになってないんだが。

<…はあ、まあいいわ。あんたがそれだけだからけきってるのに、あ
たしだけ気を張っても疲れるだけみたいだし…あたしに何もして
ないって言うのも嘘じゃないみたいだしね>

ふうとため息をついて、女は警戒を緩めた。
もつとも、完全には警戒を解いてはいないみたいだが。

<ここはスリークの森、通称迷いの森よ。あんたの格好見る限り、
この国の人間じゃないみたいだし、大方何も知らずに森に入って出
られなくなったとかそんなところじゃないの？>
<んー、まあそんなところだな>

なんとなく予想はついていたが、やはりここは日本…というより地
球ではなさそうだ。

スリークの森なんて聞いたこともねえし。

いきなり、異世界から来ました！などと言える訳もなく、俺は適当に言葉を返した。

< やっぱり…あんたもバカね。森の入り口の看板見なかったの？少し回ればいいだけの話なのに >

< いや…まあ… >

< ふふふつ、ほんとバカね >

森に入る看板も何も、気が付いたら森にいた場合どうすればいいんですか？と思いつながら、返答に困っていた俺を、女はけらけらと笑った。

< ちなみにここはなんて国なんだ？ >

< ここ？ここはユルム王国よ？そういえばあなた何処から来たの？そんな格好、あたしが旅してきた国にはないけど…？ >

あちゃー、墓穴掘ったな。

これは答えに困る。馬鹿正直に答えるわけにもいかねえし。

< 実は俺…記憶喪失なんだ… >

少し考えて、一番無難な答えを返してみた。

< つー！そうなの…、なんか悪いこと聞いちゃったみたいね… >

あれ？鵜呑みにしちゃったよ。素直な子だなあ。

< よし！決めた！あなたを街まで送り届けてあげる！温泉の時もあたしの早とちりだったみたいだし…、よく考えてみたら温泉なんだもん、誰か入ってもおかしくないわよね！ >

その可能性は限り無く0に近いとは口に出さない。だってさっき自分で迷いの森って言うてたし。そんな所の温泉に入りに来る物好き、しかも男なんざそうそういないだろうと思う。

<そうと決まればまずは名前を教えなさいよ！いつまでもあなたじゃ呼びづらいわ！>

結構強引だなと思いつつも、土地勘のない俺にとってはありがたい申し出だったので、素直に受けとることにした。

<俺はき…アオイ・キリシマだ、あんたは？>

<アオイ…ね、あたしはルナ。ルナ・マレットよ、よろしくね？アオイ >

どうやら名前が先で正解らしい。
言い直した甲斐があったな。

<ああ、よろしく>

そう言うて俺たちは握手をかわした。

和解。ちよつと無理矢理？（後書き）

やっぱり無理矢理感が否めない…文才ないなあ。

誤字、脱字、感想等ありましたらお気軽にご指摘くださると幸いです。

こんな駄文をどうぞよろしく願います！

魔法。上手く伝わるかな…orz(前書き)

なんとか今日中に更新できました(汗)

作者は描き溜めをしておりますので、常にその場のノリで描いて
おります

なので、いつか矛盾がでるのではとひやひやしております(おい

魔法。上手く伝わるかな…orz

夜も明けて、俺たちは街へ向かって森のなかを歩いている。
そういえばと思い、ルナに声をかけた。

<なあ、ルナが昨日使ってたのつてもしかして魔法つてやつか？>
<ええ！？まさかアオイ…魔法のことまで忘れちゃってるの！？>

これはかなり重症ね…と、ルナは頭をかかえる。

<いいわ、教えてあげる>

そういつてルナは歩きながら説明し始めた。

要約するとこの世界には

火、水、雷、土、風の5つの下位属性と

光、闇、無の3つの上位属性の魔法があるらしい。

そして、この世界では誰もが魔法を使うことができ、料理などは魔法の火を火種にするそうだ。

もともと、一般の人が使えるのは下位属性のみで、威力もほぼないに等しいらしい。

なので、生まれもつた才能と魔力量が多い人が、ルナのような魔導士と呼ばれるみたいだ。

魔導士と呼ばれていても、上位属性の光と闇は使える人が少なく、無にいたってはいないに等しいらしい。

魔法を使うには、頭に描くイメージと言霊がいる。

イメージさえ出来ていれば、言霊はなんでもいいらしいので、イメージしやすい言霊を探すなり、考えるなりしてもいいそうだ。

まあ一般的に広がっている言霊がイメージしやすいのもあり、結構

テンプレが多いらしい。(言霊集と呼ばれる、教科書みたいなものがあるらしい)
ただし、いくらイメージが完璧な言霊を言ったとしても、自分の魔力キャパを越える魔法は発動しないとのこと。
そのため、自分の魔力量を測る道具とやらもあるらしい。

<ちなみに、その測定器って何処にあるんだ？>
<大体のギルドにあるわよ？今日ギルドには行く予定だから、自分の魔力量を思い出すために測ってみたら？>
<んー、そうだな。そうするよ>

思い出すもなにも、まったく知らないんだがな。
あ、あと、やはり魔力にも得手不得手の属性があるらしい。
極端に言えば、火が得意な人は水が苦手…といった具合だ。
どれが得意なのかどうかも、そのギルドの測定器でわかるというので、ギルドに着いたら早速見てもらおう思う。

<…？なんだ、この気配…>

人間とも、動物とも違う異様な気配に戸惑う。

<っ！ルナ！>

<ええ、わかってる。あれは…デーモンね>

前方100メートルほど先にそれはいた。
身の丈は2メートルくらいだろうか。

人間のように二本足で立ち、頭の左右に角がはえており、牙を剥き出しにした生き物がこちらを凝視している。
口からは涎のような物を出している…うへえ、汚ねえ。

<この森には中級から上級の魔物が結構いるの。うかつに森に入っ
た冒険者が戻らなかつたって話もざらにあるしね>

なるほど、迷いの森などと大袈裟な名前を付ける理由がよくわかっ
た。

<まあ魔物のほとんどがこの森から出れないから、近くの村とか街
は安全なだけどね？この森を覆っている瘴気の中でしか生きられ
ない魔物が多いから…っ、くるわよ！>

グオオオオツ！

デーモンの叫び声で、戦いの火蓋が切っておとされた。

魔法。上手く伝わるかな…orz（後書き）

上手くこの世界の魔法の仕組みが伝わったか、かなり不安です
ます

描きながら仕組みを考えるって難しいっ！

今回は本格的な戦闘描写…はああ、技術が欲しい。。。

ご意見、ご感想、その他もろもろおまちしております！

読んでくださる方のために頑張りますっ！

戦闘。短くてすいません…（前書き）

日をまたいでしまった！

申し訳ないです。。。。

3月中は毎日更新する予定だったのに…

うまく戦闘が伝わればいいなあと思います。

チートですが

戦闘。短くてすいません…

デーモンが吼えると同時に、5つの火球がこちらに向かって飛んでくる。

<飛ぶわよっ！>

ルナの声を合図に、俺とルナは左右に飛ぶ。

ゴウツ！と、聞いたこともない音をたてて炎の塊が通りすぎ、後ろの方の木に当たり、火を撒き散らす。

<熱っ！あっつ！>

通りすぎただけでこの熱さだ。当たればただではすまないだろう。俺が熱さにやられ、手をうちわにしてばたばたやっている間に、ルナはデーモンに向かって走り出していた。

<雷よ！全てを貫く槍と成れ！サンダーランス！>

走りながら詠唱し、言霊を放つ。

この詠唱とやらをすることで、具体的にイメージしやすくなり、威力が格段に上がるらしい。

槍の形になった雷がデーモンの右脇腹を貫通した。

グオオオオツ！

デーモンが叫び声をあげる。

そりゃ痛いわなあ。

えぐれた所から緑色の液体：まあ血であろうものがどくどくと流れ出し、足元に水溜まりを作っている。

今の一撃で、デーモンは完全にルナに狙いを定めたようだ。もう一度叫ぶと、デーモンの目が赤く光りだした。

<絶対ビームだ！ビームが出るんだ！>

<そんなわけないでしょ！？>

突っ込まれてしまった。

いや、でもあれはビームだ！絶対！

否定したルナも、何が起こるのか知らないらしく、警戒して距離をとっている。

デーモンの目が強く光ると、ルナを囲むように魔方陣が3つ現れ、それぞれの上にデーモンが現れた。

<っ！嘘でしょ！？>

ルナの驚愕の声が聞こえる傍ら、俺はぶるぶる震えていた。

<召喚…だと…？>

3体のデーモンが雄叫びをあげると、それぞれの前に火球が現れる。だが、今の俺にはそんなことはどうでもよかった。

<俺の…俺の期待を返せええええええっ！>

俺は一瞬で間合いを詰めると、3体の中心、ちょうどルナがいるあたりに入り込み、回し蹴りをそれぞれの頭に叩き込んだ。

肉が潰れる感覚と同時に、頭が弾け飛び、同時に火球もかき消える。

<どちくしょーっ！（泣）>

俺は近くのデーモンの腕を引き千切り、目が光っていたデーモンめがけてぶん投げる。

投げた腕は槍のごとく飛んでいき、胸の真ん中に突き刺さった。

<ア、アオイ…あなた一体…>

倒れたデーモンをみて呟いたルナの声が、森にとけた。

戦闘。短くてすいません…（後書き）

ダメだ！技術が欲しい！

ここダメだ！つてとこがありましたらぜひご一報をば！
指摘、感想等お待ちしております。

最後に！なんとお気に入り登録1件いただきました！

ドンドンパフパフ！

とてもありがたいです！！

頑張っていますので、よろしく願います！

正体。何これgggg(前書き)

遅れてしまつてすみませんっした!!!

なんとか今日中に更新…

とても時間が欲しいです。。。

正体。何これggg

<アオイ！ちよつと聞いているの！？>

<聞いているってー。あ、おねーさんこのお肉おかわりで >

俺はルナを軽くないしながら、ウェイトレスのお姉さんに追加注文をする。

ここはスリークの森を抜けてすぐにある、カルダという街の食堂だ。

<デーモンは確かに中級クラスの魔物だけど、複数集まると上級の魔物にも引けをとらないのよ！？それを4体も、しかも素手で瞬殺なんて…。何者なのよ！いつたい！>

<そのくだりはさつきも聞いたってー、そうカッコしないカッコしない>

ルナに問い詰められている理由は、1時間ほど前にさかのぼる

〽1時間前、スリークの森〽

俺はデーモンが倒れるのを見ると、深くため息をついた。

<ビーム…見たかったのに>

<…絶対あなたバカでしょ>

むむ、バカとは失敬な。目からビームは男の夢だ！ロマンだ！

<アオイ、あなたいつたい何者なのよ？デーモンを素手で倒すなん

て、聞いたこともないわよ！>

<んー？あいつそんなに強かったの？>

<強いなんてもんじゃないわよ！あの魔物は…>

会話の最中に、グウーと俺の腹の虫が悲鳴をあげた。

<とりあえず腹へった…。もうじき街に着くんだろ？話は飯食いながらにしようぜ？>

そう言って俺はとことこ歩き出す。

<もうっ！町に着いたら絶対教えなさいよ！>

ルナは呆れながら俺に駆け寄り、町に向かって進みはじめた。

で、街に着いてご飯を食べながら問い詰められているわけである。

<何者って言われてもなあ…。ただの高校生としか言い様がないし。この肉旨い >

おかわりの肉をもぐもぐしながら言葉を返す。

<コーコーサー？それがアオイの職業なの？>

<職業…まあ職業っちや職業かな？>

<コーコーサーって何するのよ？>

<んー、勉強？3、40人1クラスで…うちの学校には5クラスくらいあったかな？>

<っな！？アオイみたいなのが150人もいるのっ！？>

ルナは口を開けたまま固まってしまった。

壮大な勘違いをしているが、面白いので放っておこう。

<ふー、食った食った ごちそうさま >

お腹をさすりながら背もたれにもたれかかる。

<そんな軍隊がいたら、国なんて一瞬で乗っ取られるじゃない…>

なにやらルナがぶつぶつ言っている。

なにやら覚悟を決めたように、ルナはキッとこちらに向き直った。

<…アオイ、あなた確か記憶がないのよね？目的はなんだったのかも覚えてないの？>

一瞬ドキリとした。

そついやそんなこと言ったっけな。

やべ、いらんこと言っちゃまったかも。

嘘を突き通してもいいんだがなあ…。

<うーん…>

腕を組んで考え込んでいると、唐突にルナが口を開いた。

<返答によっては、あなたを連行しなきゃいけないの。正直に

答えて >

<…は？>

ルナは首にぶら下げている丸い金貨（？）を取り出す。

<これはコルサ王国王宮騎士団の証よ。さあ答えて。>

<…え？>

次は俺の口が開いたままになる番だった。

正体。何これgggg(後書き)

こんな駄文ですが、ご意見、ご感想お待ちしております。

暴露。矛盾が！矛盾がああ！（前書き）

連投イエア！

はい、すいません、調子乗りました。

ちなみに作者は今日休みではありません。

いやあ、頑張った！無理矢理感がいなめないのは許してください

暴露。矛盾が！矛盾がああ！

<実は俺この世界の人間じゃないっぽいのよ>

<…真面目に答えないと本気で連行するわよ？>

いや、マジなんですけど。

そんな怖い目で見られても…。

<はあー、もうめんどくせえな>

大きなため息をついて、俺はこちらの世界に来た経緯を話した。

<…で、それをあたしに信じろと？>

<信じるもなにも、それが真実なんだから仕方がない>

<……………>

もう隠し事はめんどくさいので、洗いざらい喋ったのだが…、まあいきなり言われても信用はできんわなあ。

<…じゃあ、あなたは記憶喪失じゃないのね？つまりあたしに嘘をついていた…と>

<う”…、それに関してはごめん。申し訳ない…>

そこを突かれると痛い。

思わずシュンとなる俺。

<…どちらにせよ、一度王都には来てもらわないといけないみたいね…>

<え？なんで？>

<あなたほどの戦力なんてそうそういないもの>

…なるほどね。敵に回れば脅威になるから、今のうちに抱き込もうつてか。

<断る…と言ったら？>

<力づくでも連れて行…>

<お前が俺に勝てるんでも？>

言つてルナに殺気の塊をぶつける。

<っ！？そ、それでもあたしはあなたをつれて行かなくちゃいけないの！>

キツとこちらを、覚悟を決めた目でにらみつけるルナ。

この目は死ぬ覚悟をした者の目だ。

戦いにおいて、この目をしたやつが一番厄介だ。一度決めたら貫き通す、強者の目…。

<…わかったよ、行くだけ行ってやる。ただし、その後どうするかは俺が決めるがな>

<随分あっさり承諾したわね？あなたならもう少しゴネると思ったのに>

そりゃ、あんな目されたらなあ…。

<ああ、あと条件がまだある>

<条件？なによ？>

<手頃な武器が欲しい。なんか買って >

<…素手で充分強いじゃない>

<ばかっ！せつかく銃刀法がないのに、武器を持たないなんてあるかっ！>

<ジューターホー？なによそれ…？>

<んあー、まあ…とりあえず武器が欲しい！>

説明するのがめんどくさいので、こり押しする。
めんどくさがりですが何か？

<わかつたわよ、安いものなら買ってあげるわ。まったく>

<さーんきゅー >

<…？あなたときどき意味のわからない言葉使っわよね？それが異世界の言葉なの？>

そうか、こつちの世界にない言葉は伝わらないのか。
これから少し気を付けよう。

<そそ、ちなみにさんきゅーってのはありがとっつて意味な？>

言っつて少し考える。

あれ？言葉が通じてるのはなんでだ…？

まあいいか。便利だし。

俺は考えるのを放棄した。だっつてめんどくさ

<はっ！まだ条件あつた！>

<…今度はなによ！>

<ここの飯代おごってね >

<先が思いやられるわね…>

だって俺お金持っていないし？と言いながらけらけら笑う俺を横目に、ルナは深くため息をついた。

暴露。矛盾が！矛盾がああ！（後書き）

さあ、次はついにアオイが武器を持ちますよ！奥さん！
武器の表現…うあああー

皆さんのクリックで作者のモチベがあがります
駄文ですが、ご意見、ご感想お待ちしております。

剣に導かれし者。厨二病発動！（前書き）

重大発表ー！

なんと感想いただきました！パチパチパチ！

星峰様ありがとうございます

これからも精進しますっ！

剣に導かれし者。厨二病発動！

<何買ってもらおうかな>

<ちよつと！あんまり高いのはダメだからね！？>

そんなこんなで俺は今、武器屋に来ている。

なにかいいものはないかと物色しているのだが…なかなか気に入るものがない。

ルナがなにやら喚いているが、そんなものは当然無視である。

<んー、やっぱり剣が無難かなあ？>

飾つてある剣を1本手に取ってみる。

ズシリとくる重みがちょうどいい感じた。

鞘から抜いてみると、鏡のように研かれた刃がキラリと光る。

<親父さん、試しに振ってみてもいいです？>

<かまわんが、商品に当てるなよ？>

<そんなへまはしませんよっ…と！>

返事を返しながら軽く振ってみる。

ヒュンと風を切る音をたてて、剣がうなる。

<ほう…、あんた只者じゃねえな？>

<いやいや、そんなことないですよ？>

<はっはっは！謙遜すんな！これでも40年はギルドの奴ら相手にしてきてんだ！剣の振り方を見りゃ、大体の実力はわかるさ！>

豪快に笑いながら誉めてくれる親父さん。

うん、この人はいい人だ。

< 剣も使えるなんて、アオイ…あなたほんとに化け物ね… >

失礼なやつだな。お前は親父さんを見習え。

< うん…? >

ふと、視界の隅に一振りの剣が目に入った。
店の端っこにちょこんと置かれている。

< 親父さん、あの剣は…? >

< ああ、それか? 昔、旅の冒険者から買い取ったんだが…鞘から抜
こうとしても、うんともすんとも言わなくてな。売り物にならんか
ら倉庫の肥やしになってたんだが…。ありゃ? いつ倉庫から出した
んだ? >

俺は呼ばれているような気がして、その剣を手にとると、鞘から抜
こうと力を入れる。

するりと鞘から抜けた剣は、蒼白く輝いていた。

< 軽い…、いい剣だな >

< なっ!?!? >

先程の剣と比べると随分軽い。

刀身をみながら言う俺を、親父さんがかなり驚いた顔でみている。

< はっはっは! こりゃまいった! おい坊主! 剣を探してるんならそ
れ持ってけ! 代はいらねえからよ! >

< ええ!?!? そんな悪いですよ!?!? >

<なあに、どうせ他の奴は使えねえんだ！うちに売れない商品として置いてくより、使える人の所に行く方が、その剣も本望だろっよ！>

ガハハと笑いながら俺の肩を叩く親父さん。
腕っぷしが強く、地味に痛い。

<そういうことなら…ありがたくいただきます>
<おう！いいってことよ！>

サーブスで剣をつけるベルトまでもらい、再度お礼を言いながら店を出る俺たち。

<アオイ…あなた本当に何から何まで規格外ね…>
<まあ今回は俺自身もびっくりしてるけどな？>

呆けているルナに、ベルトを着けながら答える。

<さて、次はギルドだな。俺の魔力量とやらも気になるし>
<はあ…あたしはギルドに行くのが怖くて仕方ないわ>

ルナのため息をよそに、俺はるるんでギルドに向かうのだった。

剣に導かれし者。厨二病発動！ (後書き)

一話短いですがね…？判断しにくいです…。
こんな駄文ですが、ご意見、ご感想お待ちしております。

ギルド。説明に不安しか感じない。。。 (前書き)

少しご指摘を受けたので、少しずつですが変えていきます。
読みやすくなってくればいいなあ。
とか思ったり思わなかったり。

ギルド。説明に不安しか感じない。。。

武器屋のすぐ近くにギルドはあった。

カランカランという鈴の音と共に俺たちはギルドに入った。

「へえ、これがギルドかあ。結構さっぱりしてんだなあ」

回りには4人掛けの丸机が3つほどと、受け付けの様なカウンター、その横には大きめのボードが掛けてあり、紙がびっしり張られている。

「これでも大きいほうよ？小さい街のギルドなんかカウンターとりクエストボードしか無い所もあるんだから」

ふむふむ、じゃあこの街は結構大きいのか。

比べる対象がないため、いまいち実感がわかない。

「とりあえず登録しましょ？登録と一緒に測定できるわ」

「ん、了解」

ルナがカウンターの方に歩き出したのを見て、俺もその後ろを着いていく。

「連れの登録をお願いしたいんだけど」

「はい、かしこまりました。それではこちらの青い水晶にお連れ様の手を置いて下さい」

俺は言われるがままに水晶に手を置いた。すると水晶の中に文字が浮かび上がる。

「アオイ・キリシマ様ですね？登録完了致しました。」

「え？これだけ？」

「はい、これで指紋とお名前、ギルドランクの情報が全てのギルドに共有されました。こちらがギルドカードになります」

随分便利だなと思いつつながら、水晶から出てきた銅色のカードを受け取る。

「それではギルドランクについて説明させていただきます」

ふむふむと俺は受け付けのお姉さんに相づちを打ちながら、ギルドの説明を受けた。

要約するところだ。

ギルドには犬の散歩から魔物退治まで、様々な人から依頼がある。

依頼は難しさによってランク分けされており、簡単な方から、E、

D、C、B、A、S、SSの7種類がある。

当然ランクが高い方が報酬も高い。

…そういえば俺お金の種類知らねえや。

あとでルナに聞くことにして、説明に戻る。

ギルドカードの色でその人のランクがある程度わかるように分けられている。

E、Dが銅色、C、Bが銀色、A、S、SSが金色らしい。

最初は皆Eからスタートしていくが、自分のランク以上の依頼も受けることは可能らしい。

同ランク以上の依頼を受け、尚且ギルドの審査を通ることで自分のランクが上がる。

当然、依頼を失敗した場合には違約金として報酬の倍額をギルドに払わなければならないため、むやみに高ランクの依頼を受ける奴はいないらしい。

とまあ、こんなところか。

「それでは魔力量の測定に移りますね？こちらの透明な水晶に手を置いて下さい。光った色があなたの得意属性、映る数字があなたの魔力量になります」

俺は再度、言われるままに水晶に手を置く。

だが、水晶にまったく変化はなかった。

「……？」

頭にはなマークを浮かべている俺の横で、ルナと受け付けのお姉さんは固まっている。

「しょ、少々お待ちくださいっ！」

慌てた様子のお姉さんはカウンターの奥に走って行ってしまった。その数秒後、ピシツという音をたて、水晶が真っ二つに割れる。

「うおっ！？やべ！？壊した！？」

焦って横を見ると、ルナは両手で頭を抱えてうずくまっていた。

「もうあたしの理解の範囲を超えてるわ……」

「な、なんかマズったのか？」

「マズいどころの騒ぎじゃないわよ……いい？水晶に反応がなかつ

たのは、得意属性が無だから。水晶が割れたのは、魔力量が計りきれない量じゃないからよ。あなたほんとに人間なの？」

「あー、一応人間やつてるけど……」

「無を使える人間がいるのは知ってても、得意属性が無なんて聞いたことないわ……しかも、水晶まで……。割れるなんて噂でしかないと思っただのに……」

てことは、割れたの俺のせい！？うあー、弁償とか言われたらどうしよう。

とか考えていると、カウンターの奥からお姉さんともう一人、初老の男性がこちらに向かって歩いてきた。

やべえ、マジで請求されるんじゃないかなろうか。

男性は水晶を一瞥すると……あ、固まった。

「キ、キリシマ様……と言いましたかな？」

さすが、年を重ねているだけあって立ち直りが早い。

「は、はい。そうです」

もう俺の心臓はバクバクである。

「水晶の結果をお聞きしました。普通ならギルドランクEからのスタートなのですが、得意属性、そして水晶を割るほどの魔力量から、特例としてAランクからのスタートにもできるのですが、いかがですか？」

「……………へ？」

お金を請求されたらどうやって逃げようかと考えていた俺は、予想外の言葉になんとも間の抜けた返事を返してしまった。

「あ、ああ……できるならそれでお願いします」

「本当ですか！？ありがとうございます！あと一つお願いがあるのですが……」

「お願い？何でしょうか？」

「近々この街で開催される大会に、うちのギルド代表として出て頂きたいのです。優勝者には賞金も出ますし、出ていただけのならばうちのギルドからもいくらか謝礼金という形でお渡しまするので、損はないと思うのですが……」

ふむ、と言って考える。

まあこの先お金は必要になってくるだろうし、出るのも悪くはない……か。

「わかりました、お受けしましょう」

まあ優勝したらこのギルドにもお金が入るのだろう。でなければギルド代表などに誘う意味がない。

「それを隠して誘うのは気に食わねえがな」

「はい？なにか仰いましたか？」

「いえいえ、精一杯がんばりますよ」

作り笑いをしながら、俺は男性と握手をかわすのだった。

ギルド。説明に不安しか感じない。。。 (後書き)

あー、説明って難しい…orz

こんな駄文ですが、ご意見、ご感想お待ちしております。

初めての魔法。(前書き)

さあ、遂に亀更新の本領が発揮され出しましたよ！
先生！ネタが思い付きません！

初めての魔法。

「出るのはいいけど加減しなさいよ？変に目立ったら動きにくくなるわよ？」

「そうだなあ……………」

所かわって、ここは宿屋の一室である。

ギルドを出ると結構いい時間だったので、夕食を済ませ宿をとった。

「で、なんで俺達は同じ部屋にいるんだ？」

「しょ、しょうがないじゃない！女将さんに無理矢理一緒にさせられたんだから！」

話を聞くと、女将さんの勘違いでこの部屋になったらしい。

<遮音は完璧だから安心していいわよ >の一言と共に。
んー、見事にベッドが1つしかない。

「とりあえず今日はもう寝るわ。ベッドはルナが使っていていいぞ」

幸いソファがあったので、そこにゴロンと寝転がる。

「え、でも……………」

「じゃ、おやすみー」

さすがに女の子をソファで寝かすわけにもいかないなので、多少強引に言葉を切る。

ルナがベッドの方に行くのを確認すると、俺は目を閉じて眠りについた。

「ん……」

チユンチユンと雀のなく声で目が覚めた。

この世界にも雀がいるのかと、眠い目をこすりながら窓に近づく。

「……でかつ!?!」

外の道を見ると、体長50センチ程の雀の様な鳥が3匹ほどとまっていた。

「今更ながら……ここ日本じゃないんだなあ」

こういった光景を見ると、嫌でも異世界であることを認識させられる。

おかげで完全に目が覚めてしまった。

ふとルナを見ると、気持ち良さそうにすやすやと眠っている。

「起こすのも悪いしなあ……。散歩でもしてくるか」

戻ってくるころにはルナも起きているだろうと思い、俺は街をぶらぶらすることにした。

「そういえばこの世界では魔法が使えるんだよな」

道を歩きながらそんなことを考える。

そうだ、魔法を使ってみよう。

その考えに行き着いた後の行動は早かった。
すぐに街を出ると、迷いの森の手前まで移動し、ここで魔法を使っ
てみることにする。

「入らなけりや迷うこたあねえだろ。街も見えてるし。さて……確
か、イメージと言霊だったか」

まず思い出したのは、ルナが使った魔法である。一度見たことがあ
るので、イメージするのは簡単だった。

俺は5センチくらいの火の玉をイメージしながら、右手をかかげ、
言霊を唱える。

「ファイアーボール」

すると、手のひらの上に燃え盛る火球が現れた。

さほど熱は感じない。術者にはある程度補正がかかるようだ。

「うおー！すげえ！マジで出たああ！うひょー！！！」

もう俺のテンションはMAXである。

出したからには試してみたいのが人の性というものだ。

遠くの地面に火球を投げる。

ドゴオン！という爆音と共に30メートル程の火柱が立つ。

「あつつ！あつつ！熱いつ！」

コントロールを離れると補正はなくなるらしく、見事に熱風が直撃
する。

「あー……、やり過ぎたかな……？つか、ルナのより弱くイメージ

したのにルナ以上の火力ってどうよ？」

もう辺り一面、惨劇としか言いようがないくらいの焼け野はらである。

雑草すら残っていない。

「ま、いつか。誰も困りはしないだろうし」

その後、威力を最小限に抑えたイメージで術をいくつか試し、俺は宿屋に帰った。

その日街では火柱の噂でもちきりになり、ルナにバレた上に、こっぴどく叱られたのは言うまでもない。

初めての魔法。(後書き)

この小説がどうなるかまったく検討がつきません！
まだ葵の強さの秘密も書いてないし。。。。

こゝ、こんな駄文ですが、ご意見、ご感想お待ちしております。

少女。
(前書き)

タイトルがだんだん適当になってきた気がする。
ま、まあ関係あるタイトルだし!?

少女。

火柱事件から数日が立ち、噂も落ち着いてきた頃、ギルドのお偉いさんから連絡が入った。

今日の昼から大会があると。

……いやいや！遅くね！？普通もつと前もつて連絡するもんじゃないの！？」

せめて前日とかさ！？」

だが、不満を言っている間にも大会の時間は刻一刻と迫ってきている。

「はあ……しゃーない、行ってくるか」

「行ってらっしゃい、やり過ぎちゃダメよ？」

「ルナはどうするんだ？」

「あたしは客席で見させてもらおうわ」

「お前も強いんじゃないのか？」

「あたしが出た所でなんの得もないし？」

たしかにと思いつながら俺は支度をする。

支度と言っても腰に剣をぶら下げるだけなのだが。

じゃ、行ってくるかね。

軽くルナに手を振りながら宿屋を出る。

「会場は……商店街を抜けた先だったな」

こないだから徘徊……もとい、散歩をしつづけているため、この街の地理は頭に入っている。

頭の地図をもとに、会場に進み出したのだが……

「……人がうぜえ」

大会を観に行く客なのであるう人が、まあ居るわ居るわ。

商店街には出店もあるため、数が半端ではない。

これにもまれて進んでいると、出場の受付に間に合いそうにない。

「仕方無い、近道するか」

そう言つて裏道に入り込む。

あんまりここは使いたくなかつたんだけどなあ。

柄が悪いやつが多いし。

前に、知らずに入り込んで10人ほどに囲まれたことがあるのだ。

まあ死なない程度にいたぶつておいたが、わざわざトラブルに首を突っ込むほど俺はMではないので、極力避けてきたというわけだ。

「ぐへへ、おとなしくしろよ嬢ちゃん。たっぷり可愛がつてやるからよお」

ほら来た。ここはトラブルが日常茶飯事だ。

この街の闇の部分なのであるう。

つーか、ぐへへって。今どきそんなセリフ言うやつ見たことねえぞ。

声のした方を見ると、路地の奥で男二人が少女を囲んでいた。

「……………」

「そんな心配すんなつてお嬢ちゃん、すぐ終わるからよお」

「そうそう、ちよーっと服を脱いでもらうだけだしなあ？」

ガハハと笑う男共。

虫酸が走るな、殺してやろうか。
だが、俺が動くより先に少女が動いた。

「『フリーズアロー』」

少女から氷の矢が放たれ、一人の男に当たる。
その瞬間、男は氷付けになった。

「このガキ！ やりやがったな！？」

片方の男が腕を振り上げ、殴りかかろうとするが、俺は一瞬で男の隣に移動し、その手首を掴む。

「なっ！？ 誰だテメエ！ 邪魔すんならぶっ殺すぞ！」

俺は無言で男の手首を捻りあげる。

「ギヤアアアア！」

ゴキリという音と共に手首の骨が折れる。

「消える。目障りだ」

手を離すと、ヒィイと叫びながら走って逃げていった。

「……お礼は言わない」

「は？」

「私一人で対処できた。だから、お礼は言わない」

「まあそうだろうな。でも男は困ってる女の子を助けたいもんなんだよ」

「……………変な人」

そう言っつて俺の顔をじっと見つめる少女。
腰まである長い青髪に青い瞳。まごうことなき美少女だ。男に襲わ
れるのもわかる。

……………ん？誰かににてる気がする……………？

「……………時間」

俺が考えていると、少女はそう呟いて、走り去っていった。

「時間……………？あ、やべ！俺も時間ねえんだった！」

もうすぐ受付が終わる頃に、俺はようやくやく会場にたどり着いたのだ
った。

少女。(後書き)

無理矢理こんなキャラを出しました！

何故かって？作者が無口な子が好きだからさ！

わかってもらえると幸いです。

こんな駄文ですが、ご意見、ご感想お待ちしております。

予選一回戦(?) (前書き)

亀更新すんませんっした!

書く暇が…あつたけどやる気がおきませんでした

ごぶっ!て、鉄球を投げるのは反則…ぎゃあああああ!

予選一回戦(?)

「ふえー、なんとか間に合った」

俺は時間ギリギリで受付を済ませ、控え室の椅子に座りこんだ。

まわりには俺を含めて、10人ほどの男女が待機していた。

俺がいるのは第三控え室なので、少なく見積もっても30人くらいは大会にでるらしい。

結構多いな……めんどくせ。

そんなことを考えていると、コンコンとドアをノックし、受付のお姉さんが控え室に入ってきた。

「選手の皆様、今から開会式のあとに予選が始まりますので、闘技場のほうに移動をお願いします」

開会式とかあんのか……マジでめんどくさいな。

ぞろぞろと控え室を出る人らをみながら、俺は重い腰あげて闘技場に向かった。

「長い……」

俺が闘技場に来て、かれこれ2時間はたっただろうか。

お偉いさんのありがたい話が始まった時は、学校の校長を思いだし、ほんわかしながら聞いていたのだが……。

まあでるわでるわお偉いさんの群、ムレ、むれ。

しかも代わるがわる話す内容が、言い方を変えているだけでほぼ一緒。

まさに生き地獄である。

今の人で7人目……あと一人でてきたら、うねうねしながら合体しだすんじゃないだろうか。

「では皆さん、御武運を祈ります」

パチパチと拍手を送られ、お偉いさんが席に戻る。

「それでは、予選のためのくじ引きを行いますので、選手の皆さんは左端の列の方から前に進んでください」

やっと本題か。待ちくたびれたよまったく。

前に進みながらざっと人数を数えてみる。

ひい、ふう、みい……20と……8。28人か、結構多いなあ。

総当たりじゃないってことは、最初に14つ試合があるのか。

1日じゃ終わりそうにねえな。

んん？微妙にシードっぽい場所はあるのか、出来ればそこがいいなあ……。

そんなこんなでくじを引く番が回ってきたので、とりあえず引いてみる。

「はい、12番ですね。それでは予選までの間は自由行動ですので、外にでてもらっても結構ですし、控え室に居ていただいても構いません。町中に放送が流れるので、それを目安に闘技場にお越しください。」

はい、ど真ん中。ありがとうございます……。

「あ、そうそう。試合開始5分を過ぎても闘技場にいらっしやらない場合、不戦敗になりますのでお気をつけくださいね?」

「はい、わかりましたー」

返事もそこそこに、俺は闘技場をでる。

今までのストレスを発散しに……。

人通りの少ない裏道にスツと入り、しばらくボケーっとしていると

……

「なあにいちちゃん、大会出るんだろ?」

いかにもといった感じの筋肉ゴリゴリの覆面男が声をかけてきた。

待ってました!絶対来ると思ってたよこのパターン!ワクテカが止まりませんwww

「ええ、そうですけど……?」

あえて少し怯えた感じで答える俺。やべえ、吹き出しそうだwww
そんな俺にお構い無く話しかけてくる覆面男。

「俺もでるんだよにいちちゃん。で、番号がな?11番なんだ。言いたいことはわかるよな?」

指をバキバキならしながらこちらに近づく。

ちょwwwどこのトンヌラですかwww

「まあこのままおとなしく帰ってくれりゃ、痛い目みないで済むんだが……?」

無駄に格好をつけるトンヌラ。

ぶふう!

もう俺は限界だった。こらえきれずに吹き出した唾が相手にかかる。

「てめえ!? 何しやがる!」

「だってトンヌラwwwお前もつトンヌラにしか見えねえwww」

「ぶ、ぶつ殺してやる!」

トンヌラは知らないだろうが、バカにされているであろうことは理解したトンヌラは、顔を真っ赤にし、腰のナイフを抜いて襲いかかってきた。

「うん、遅い遅い。欠伸がでるよ」

俺が屈んで足払いをかけると、見事にすっころんだトンヌラ。まんまトンヌラwww

その隙にナイフの腹を蹴り飛ばして武装解除、自分の剣を相手の喉元に押し付けて現在に至る。

「で、君。試合でなの?」

満面の笑みでそう問い掛けると、失禁しながら気絶した。きちやないな、まったく。

《予選番号11番、12番の選手の方！間もなく試合が始まりますので、10分以内に闘技場にお戻りください！》

剣を鞘に戻しているとアナウンスが流れてきた。

おー、よく聞こえる。これなら外でも安心だね。

さて、不戦勝でも貰いに行きますかね。

言っただ俺はスタスタと闘技場に歩いて行った。

予選一回戦(?) (後書き)

はい、とりあえず一回戦(?) (終了です

いやあ、ほんとにすいませんでした。モチベがなかなか…申し訳ないです。

他の方々はどうやってモチベあげてるんだろうか…。

こんな拙い文章ですが、ご意見ご感想お待ちしております。

怒ったルナは神より強し(前書き)

はい、なんとか早めの更新を目指したら、とことん短くなりました

∴orz

つ、次は頑張ります∴はい(∴>|<∴)

怒ったルナは神より強し

闘技場に着いた俺は、特にすることもなくポケーつと突っ立っていた。

来るわけもない相手を待つのは退屈である。

「くあ〜……、ねむ」

そりゃ欠伸もでるよ、暇なんだもん。

「試合開始後、5分が経過致しましたので、ルール通りキリシマ様の不戦勝といたします！」

ざわざわと客席から不満の声があがる。

それはそうだろう、この客たちは戦いを見に来たのだから、不満を言うのも無理はない。

だが、司会者はたんと進めていく。

こういうことはよくあるのである。

まあ人数が多ければ管理も難しくなる為、俺がされたようなことは暗黙の了解なのだろうが……

「かなりずさんだな……」

まあこの規模の大会なら仕方ないかと思いつし、俺は闘技場を後にすることにした。

向こうの方で、こちらに手を降る人が見える。

「あ、いたいた。アオイー！」

「なんだ、ルナか」

「なんだとは何よ！せっかく応援に来てあげたのに」

「悪い悪い、試合すらしてねえから応援できなかったな」

「そつちを謝るのね……」

深いため息をついて、俺をジト目で見てくるルナ。

「あなた、またやらかしたでしょ」

「さて、ななな、なんのことですつ？」

目を明後日の方に向け、口笛を吹きながら誤魔化してみる。

「あれだけ目立つなって言ったばかりなのに……」

言っつてルナは、さらに深いため息をついた。

「だつてさ！しょうがねえじゃん！あんな堅苦しい中で何時間も待たされちゃ、鬱憤もたまるつて！」

「アオイ？自分が規格外だつて自覚はある？」

「」……米つぶ程度なら……」

「少ないわよ！もっと自覚を持ちなさい！」

「しゅ、しゅみましえん……」

ルナの迫力に押されて、つい謝ってしまった。
いかん！このままでは主導権が……！

「いやでもだつ『何か？』すいませんっした！」

む、無理だ！今のルナの、般若の如き形相なら神すら土下座するに
違いない……。

「まあいいわ。次の試合は明日って聞いたし、今日はもう宿屋に戻
っておとなしくしてなさい。次に何かやらかしたらどうなるか……わ
かるわね？」

「は、はひ……」

その日は一日中ソファアの片隅でカタカタ震える葵がいたとか、い
なかつたとか。

怒ったルナは神より強し（後書き）

こんな駄文ですが、ご意見ご感想お待ちしております。

剣にまじわるエッセイ(前書き)

はい、もうお分かりですよね！

遅くなりましてすいませうわなにするやめt)ry

剣にまつわるエトセトラ

チユンチユンと鳥のさえずりが聞こえる。

例の、すずめもどきが鳴いているのか？などと思いつつながら薄く目を開けると、天井が見えた。どうやらあのまま寝てしまったらしい。

ダルそうにソファから体を起こすと、かぶった覚えのない毛布がはらりと落ちた。

たぶん、ルナがかけてくれたのであろう。

ベッドを見ると、ルナがスヤスヤと眠っていた。

俺は心の中でお礼を言つと、装備を身に付け、極力音を立てないように部屋を出た。

「さて……今日は2回戦目だったな。軽く散歩がてら走ってみるか」
えっほえっほと、ならす程度にジョギングをして体を温める。
まあ、このスピードが普通の人の全力疾走より速いのはご愛嬌である。

1時間ほど走り、体も温まってきたので、そのまま街の外に出る。

「よっ……と、このくらい離ればいいか。さすがに街中で剣振り回してちゃ危ねえしなあ」

スピードを落とすにつつ、腰の剣に手をかけ　右足を軸に止まり、
そのまま一気に居合いの要領で振り抜く。

音もなく振り抜かれた剣は、朝日を受けて蒼くきらめいていた。

「やっぱりなんか不思議な剣だな……、名刀ってのは当然なんだろうけど、それ以外にも何かを感じる……」

「さて……久しぶりだな。剣をまともに振るのは」

剣を中段に構え、なぎ払いから流れるように切り上げる。

「ふっ！」

そこから剣を降りおろすと、スパン！という音と共に地面が裂けえ？

いやいや、落ち着け俺。技を使った訳でもなく、地面が切れるわけがないじゃない。

コシコシと目をこすり、閉じたまま深呼吸をする。

「すー……はーっ……、よしっ！」

おもいきって目を開けると、そこにはまっさらな地面が
な
かった。

30メートルはあるであろう、縦の線が地面に続いていた。

「おおっ……」

これがバレたら……俺はルナに殺されるかもしれない……。

「はっ！閃いた！魔法で直せばいいんじゃない？」

そう考えた後の俺の行動は迅速かつ、丁寧だった。

「砂よ、我に従う人形と成れ！《ゴーレム》！」

周りの砂が集まり、こねくりまわって、親指くらいの大きさの人型になっていく。
その数ざつと……どんだけだ……？かるく1万はいるんじゃない？
知らねーけど。

「よしっ！全員その溝に隙間なく入れー！」

うのようによとゴーレム達が溝に入っていく。
うあ、自分でしといて何だが……キモチワル。

「うえ……か、解除」

パチン！と指をならすと、一瞬でゴーレム達が砂に戻る。
地面の溝は、砂で綺麗に埋まっていた。これならばと見分からないだろ……たぶん。

「なんだ？剣が反応してる……？魔力に？」

剣を見てみると、日の光の反射ではない蒼い光が、刀身を覆っていた。

「試してみるか」

言っって俺は、剣に魔力を流し込んでみる。

刀身の光がだんだんと強くなり、カツ！と閃光する。

「ご主人様あーっ！」

「1じぶっ！？」

思わず目を閉じた瞬間、何かに腹にタツクルをかまされ、呻き声をあげる俺。

「ご主人様あつ！逢いたかったですう！長い間ほつとかれて寂しかったんですよう！？」

「かつ……！こつ……！？」

言って、みぞおちに頭をぐりぐりしてくる何か。
力が半端ない……息ができね……。

「ちよつと聞いているんですかあ！？ご主人……さま……？」

お腹の辺りから見上げてくる、何かと目が合った。
その瞳にはうつすらと涙を浮かべていた。

「うわひゃあああつ！？」

「おぶしっ！？」

テンパる何かに突き飛ばされ、文字通り吹き飛ば俺。

ずがああん！

しばらく空の旅を楽しんだ後、勢いよく迷いの森の木にぶつかり、ようやく止まった。

「な、なんなんだ一体……」

俺は呆けた状態で、倒れたまま空を見上げていた。

剣にまつわるエッセイラ（後書き）

こんな駄文ですが、ご意見ご感想お待ちしております

剣にまつわるエトセトラ2 (前書き)

もう言葉はいらないはずさ！

じゃんぴんぐ土下座っ！……！！

決まった…… (ドヤ顔)

剣にまつわるエトセトラ2

今俺は、あぐらをかいて地面に座っている。

目の前には、歳でいうと8〜9歳くらいの、小さな女の子が正座中である。

腰まである、青く長い髪をだらりと下げてうつむいている女の子は、時折申し訳なさそうにこちらをチラチラと見ていた。

なんだこの状況は……

とりあえず少し記憶を整理してみる事にする。

俺が吹き飛ばされてしばらくすると、向こうから壮絶な土ぼこりをあげて何かが走ってきた。

倒れたままそちらを見やると、小さな女の子が顔面蒼白でこちらに向かってくる。

「だっ、だだだっ！大丈夫ですかっ!？」

急停止し、言うと同時に正座する女の子。

かなり勢いがあったため、止まった衝撃でかなりの土ぼこりが舞う。

「ごめんなさいっ！その……知らない人でびっくりしちゃって……
つい」

「ん、平気平気 さすがに吹っ飛ばされるとは思ってなかったけど
ね？」

「はうう……、ごめんなさい……」

ここで地雷を踏んでしまったらしい。

肩をがつくりと落とし、目に見えて落ち込んでしまった女の子の前に、あせる俺。

慌てて起き上がり、あぐらをかく。

そして、現在に至る……という訳だ。

「あー、えと。ほんとにだいじょぶだから気にしなくていいよ?」

腕を曲げて、元気元気!とアピールしてみる。

「ううう、でもお……」

「そ、そんなことよりさ?俺のことを誰かと勘違いしてたみたいだけど……?っていうか、まず急に現れた君は一体……?」

少し強引に話をそらす。

まあかなり気になっていた事なので、聞きたい気持ちが強かったのも事実だが。

「ふえ!?あ、はい!えと……私は剣の精霊というか、剣そのものですね。間違えちゃったのは……あなたから前のご主人様と同じ魔力を感じたというかなんと言うか……」

おや?と思い、女の子に質問を返す。

「うん?魔力つて、人それぞれ性質が違うんじゃないっけ?おんなじ魔力なんかありえるの?」

「はい、普通はありえませんが……。だから間違えちゃったって言うのもあるんです……」

ふむ……。まあ今さら規格外の事が起きたところで、もう驚きはしないのだが……。

俺と「同じ」魔力というのがどうもひっかかる。
異世界から来た、この俺と。

「もしかしてさ、前の主人って異世界から来たとか言ってなかった？」

この言葉に、女の子は弾かれたように頭をあげ、驚愕の表情で俺を見た。

「っ！？どうして知ってるんですか！？まさか紅様を知ってるんですか！？」

「なっ！？く、紅っ！？」

思いがけない女の子の言葉に、次は俺が驚かされる番だった。

「紅ってまさか……桐島紅かっ！？」

「そ、そうです！やっぱり紅様を知ってるんですね！？紅様は今何処にいらっしやるんですかっ！？」

嘘だろ……。ここに親父がいた……？

期待の眼差しで見つめてくる女の子を見ながら、俺は苦虫を噛み潰した様な顔で、小さく舌打ちをした。

剣にまつわるエトセトラ2 (後書き)

膝にアザができてる！

アザがどえきとうえるうー！

こほん、こんな駄文ですが、ご意見、ご感想お待ちしております。

罪（前書き）

悩んだ……今回のお話はとても悩みました。
プロットないとまとまりませんね……ほんとに。

罪

10年前。某所

パン！

一発の銃声と共に、一人の少年が床へ倒れた。胸から液体を吹き出し、瞬く間に辺り一面を真っ赤に染める。

「葵っ！そんな……っ！紅さん！葵が！葵が……っ！」

横たわる少年を膝に抱え、悲痛の声をあげる女。

「っ！？くそがああ！貴様らああ！！」

傍らの男は怒りを撒き散らしながら、銃声の元に走り出す。音源には3人の男がいた。

「貴方がいけないですよ、桐島さん。おとなしく組織に従っていただければいいものを……」

言うなり、1人の男は腰からナイフを抜き、桐島と呼んだ男に襲いかかる。

「従わないならば、消せ。それが組織の命令……ですっ！」

言い終わる前にナイフを突き出す。

桐島はそれを紙一重で避け、伸びきった腕に肘鉄を入れる。

ゴキリと鈍い音をたて、腕が曲がるべきでない方向に曲がる。

「ぐあああああつ！」

「油断するな！相手はあの桐島だぞっ！」

別の男の激が飛ぶが、当の飛ばされた本人は、桐島に首を折られ、すでに事切れていた。

2人の男は一斉に後ろへ飛び、桐島から距離をとる。

「不用意に攻撃するからだ、バカが」

「連携なしで勝てる相手じゃないぞ」

「わかつてる、いく……ぞっ!？」

わざわざ策を作る機会を待ってやるほど、桐島は甘くない。

グダグダと喋っている間に、片方の男との距離を一気に詰め、顎に掌底を叩き込む。

真下から入った掌底により、首ごと引き千切れた男の頭は、赤い絵の具を撒き散らしながら床に転がった。

「ひっ!？ば、化け物……」

それが3人目の男の、この世に残した最後の言葉となった。

「翠^{みどり}っ！葵は!？」

「駄目……、血が……血が止まらないの……っ」

翠と呼ばれた女　桐島翠は、息子の葵に懸命に回復魔法を試みていたが、それを馬鹿にするように、傷口からは血が溢れだしていた。

魔法は万能ではない。

たとえ傷を治すことはできても、死んだものを蘇らせることはできないのだ。

死体を動かすことは可能でも、そこに心は存在しない。

紅に勝るとも劣らない、大魔導師の翠ですら、それを覆すことは不可能だった。

「くそっ！俺が油断さえしなければこんなことには……っ！」

ギリツと奥歯を噛みしめ、紅は毒づく。

「……継承するしかない……か」

「っ!?!」

紅の言葉に、翠は驚きを隠せない。

「正気なの!?紅さん!葵はまだ6歳なのよ!?アレに耐えられるとは思えないっ!それに、継承をすれば紅さんが……っ!」

「だが!!……助かる可能性があるのはこれだけだ」

「っ!!そ、それは……」

紅の言葉に、翠は黙るしかなかった。

しばしの沈黙。

葵をそつと床に寝転がせると、翠は覚悟を決めた様子で立ち上がった。

「わかったわ、やりましょう。それしか……方法がないのなら……」

紅は頷くと、ゆっくりと深呼吸し、心を落ち着かせる。

「……翠、すまないな」

「あなたは言い出したら聞きませんからね、昔っから」

ニコリと笑って言う翠に、紅は苦笑する。

「葵を……頼む」

「……ええ」

「始めるぞ!」

紅は叫び、自身の片目をエグリ取る。

ぶちぶちと筋の千切れる音と共に、引き抜いた鮮血にまみれているソレは、さながら、紅い宝石の様に輝いている。

紅は、ソレに自分の力を全て注ぎ込む。

紅いソレは輝きを増し、今にもハジケそうなほどだ。そして葵にふらふらと歩み寄る。

「自分の……体の一部に力を込めて譲渡するのが継承の方法だ……」。

手とか足でもいいんだが……一番成功しやすいのが……目……なんでな……」

息も絶え絶えに、紅は言葉を紡ぐ。それは言い訳のようにも聞こえた。

「息子の……目を潰す親父を……許してくれな……」

そう言っただけで葵の目に、震える手をゆっくりと、だが確実に伸ばしていく。

「っ……！」

思わず息を飲み、唇を噛む翠。

だがその目は、涙を浮かべながらもしっぴかりと、2人を最愛の人と、最愛の息子を視ていた。

「翠っ！俺が死んだら……すぐに封印を……！」

コクリと頷く翠。その口からは、赤い線が描かれている。それほどまでに、唇を強く噛みしめたのだろう。

それを見てとると、紅は笑みを浮かべ、ありがとくと呟いた。

そして 葵の左目を引き抜き、光輝く宝石をはめ込んだ。

「「あゝあゝ あああああつっつ……！」」

これが翠の、大魔導師たる由縁だった。

「葵は……私が守るっ！『エンブレイスウォーム』！」

葵の体が光に包まれ……ゴキリと鈍い音をたてて、翠の足があらぬ方向へ曲がった。

「ぐっう……！！反発が……かなり強い……！？」

今の状況は、要するに魔力の力比べだ。

歌と魔法の効果で、葵の魔力はほとんどないに等しいのだが、それでも翠の魔力は競り負けている。

負けている分、その力は術者に直接ダメージを与える。

「負けるもんですか……！守るって……約束したんだからっ！」

両手をつきだし、吠える。

「あああああああああつっつ！！」

腕が軋む。折れたのだということは、感覚でわかった。

だが、ここで気を抜くわけにはいかない。

生命力を魔力に変換、さらに力を上乘せする。

葵を包む光が強くなり、そして一気に収束する。

カツ！と、まばゆい閃光が走り、翠は近くの壁に吹き飛ばされた。

「ああ……い……」

翠は朦朧とする意識のなかで、我が子の姿を見つけた。

「大丈夫、大丈夫よ…？もう怖くないから…」

壁を使い、なんとか立ち上がる。

「おいで。もう心配ないから」

壁にもたれながら、翠は我が子を抱き締めんと腕を伸ばす。

そして

翠の意識は闇に消えた。

罪（後書き）

こんな駄文ですが、ご意見・ご感想お待ちしております、

血は争えませんよ、ほんとに。(前書き)

早めのペースで更新したのには、理由がありますのです。
もしかしたら、次の更新がかなり伸びるかもです。

エクシリアが俺を呼んでいるっ!!!

ふはははは！ミラ姉最高！エリーゼたんカワユスーっ

血は争えませんが、ほんとに。」

両親の事は、俺が物心ついたときに教えられた。

まあ、教えられようが、教えられまいが、全て知っていたのだが。俺が殺めた事実は脚色されていたが、そんな気遣いも意味がなかった。

おそらく、親父からもらった目のせいだろうと思う。あの出来事は今でも鮮明に思い出せる。

……忘れたくても、忘れられるはずがない。

あまり考えたくなかったんだがな……。

母親をこの手で引き裂いた感触を思いだし、俺は青ざめた顔で小さく身震いをした。

「あおう……大丈夫……ですか？」

俺のそんな様子を見て、女の子は心配そうに声をかけた。

「ん……あ、ああ……ごめんごめん。大丈夫だよ」

言って、俺は考え込む様に腕を組んだ。

さて……どう話すか。
今までの会話からするに、この女の子は、親父がこっちにいた時に使っていた剣なのであろう。

しかも、かなりなついている……。

下手に死んだなどと口走って、泣かれた日にゃあ、しかも女の子を泣かせたなんてルナの耳に入ったりしようもんなら……。考えただけでもおぞましい……。

ガクブルしていると、今度は不思議そうな目で、こちらを見てくる女の子。

うん……？ そついえば……

「なあ、質問に答える前に、先に質問していいか？」

「……？ はい、なんでしょお？」

ふと頭に浮かんだ疑問をぶつけてみる。

「君は剣なんだよな？ 女の子の姿をしてるけど、性別と違ってあるのか？」

「えと……、性別とかはないんですけど、基本的に私を使うマスタの望む姿で具現化する事ができるんです。今の姿は、紅様が決めてた姿で……。元々名前とかもないんですけど、紅様が男女で使える名前がいいねって言うてくださって、アオイっていう名前もつけてくださってたんで……」

この辺で、プチっと、俺の中で何かが切れる音がした。

「あんのロリコン変態クソ親父がああああ！ しかも息子に、自分の趣味丸出しの剣と同じ名前をつけるたあ！ どおいう見ぢやボケえええええ！！！」

「ひうううううっ！？」

俺の怒声に、びびりまくるアオイ（剣）。

大気が震え、森から一斉に飛び立つ鳥の群れ。

やべ、ちよっとやり過ぎたかも……。

「えう…あう……」

半泣きになりながら、こちらを上目遣いで見てくるアオイ（剣）。
うぐ……、親父の気持ちがわからんでもない……。
だ、だがしかし！それとロリコンとは別物！だと！思いたい！たぶん……。いやきつと！

こほん。とりあえず、落ち着くまで頭をポンポンしてあげることにした。

涙を浮かべつつ、はにかんでいる様子は、とてもかわいい……。

べっ、別に可愛くなんかないんだからね！

~~~~~

「あうー、えと……。親父って呼ぶってことは、紅様のお子さんなんですか……か？」

ようやく落ち着いたのか、会話をする余裕がでてきたらしい。

「ああ、うん。まあ……ね」

あのロリコンを思いだし、気分が落ちる。  
変なことしてねえだろおな……クソ親父。

「まあその……親父はさ。その……」

「……やっぱりそうですよね……、紅様も人の身ですし、100年  
もたってたらお亡くなりになってますよね……」

……なんですと？

「ひゃくねん！？親父がいたのは100年前なのか!？」

一瞬思考が停止した後、思わず素っ頓狂な声をあげる。

「は、はい。紅様がこの世界から去ってから、もう100年になり  
ますう……」

そうか、俺のいた世界とは時間のベクトルが違うのか……。  
まあ異世界に来たって時点で、元の世界の考え方は当てにならないわ  
なあ。

おもいつきりファンタジーだな。わかってたつもりだったけど……。  
自分の考えの甘さに、少し反省する。

だが、これはこれで都合だな、親父の死を時間が解決してくれた  
し。

「まあ親父はそんな感じ……かな」

一言で適当に流しておく。ついでに軽く落ち込んでいるフリをして  
おいたので、これ以上深くは突っ込まれないだろう。

「そお……ですか。……よおし！わかりましたあ！それでは新しいご主人様……じゃなかった、新しいマスターの為に精一杯がんばりますねっ！」

新しいマスター？

あ、そか。そういえばこの子、剣だったんだ。

忘れかけていた記憶を、頭の隅から引つ張り出す。

俺が新しい持ち主だもんな。

「ああ、よろしくな？俺は葵……なんだが……」

名前が一緒だとややこしいな……。

「はい よろしくお願ひしますっ 同じ名前って、そおいうことだったんですね……」

苦笑いしながら、肯定する俺。

「あ、そういえば、なんでさっき、ご主人様をマスターって言ひ直したんだ？」

「あ、ええと、それはですねえ？もともと私たちは、持ち主様の事をマスターって呼んでるんですけど、紅様のご主人様って呼んでほしいっておっしゃったので、そのときの癖でつい……。葵様も、ご主人様の方がいいですかあ？」

「い、いや。マスターの方がいいよ……」

クソ親父……。あの世で会ったら、もっかい殺してやる……。

そうですか？と、首をかしげるアオイ（剣）の様子を見ながら、親父をブチ殺す誓いをたてる。

さて、と。そろそろ街に帰るか。腹も減ってきたし。

「よし、じゃあ街に帰るからついておいで」

「はい わかりましたあ」

元気な返事と共に、とてとと俺の隣に走り寄ってくる。  
か、かわい……。

はっ！？だめだだめだ！親父と同類になるのか！？俺！！

「とと、ところでさ。名前のことなんだが、別の呼称にしてもいいのか？」

必死に冷静を装いつつ、頑張つて……、すごく頑張つて、気合いで頭の中の考えを会話にもつていく俺。

よくやった俺、すごいぞ俺！

「はい 大丈夫ですう むしろ、元々名前というものがないので、つけてくださるだけありがたいですう」

俺の奮闘など露知らず、嬉しそうに声をあげるアオイ（剣）。  
ふむふむ、となると……どんな名前がいいのやら。

「……………アウイ。アウイってのはどうだ？」

確か、青い宝石でアウイナイトってのがあった気がする。  
我ながら安直だな。

「アウイ……アウイ　綺麗な名前ですう　ありがとうございますっ  
」

だが、本人はかなり気に入ってくれたようだ。  
にぱぁ　という擬音がびつたり笑顔を浮かべてはしゃいでいる。

ごふっ！

……それは反則ですぞ旦那ア……。

そして俺は、ついに禁断の言葉を口にす。

「ちょ、ちょっと、なんですって言ってみ？」

「……？なんです？」

首をかしげながら、言われた通りにするアウイ。

「じばぁー！

ぶっ倒れた俺は、あたふたしながら駆け寄ってくるアウイを見て、  
こう思ったのだった。

俺は親父の血には逆らえない、と。

血は争えませんよ、ほんとに。(後書き)

こんな駄文ですが、ご意見・ご感想お待ちしております。  
さて、エクシリアエクシリア(いそいそ)

最近物忘れが激しくて……（前書き）

お待たせしまして

え？待ってない？

そんなつれないこと言わないで

ほらほら、刃物なんか危ないからおろし……

さく

ぎゃああああ！！！

最近物忘れが激しくて……

街につく頃には、もうすっかり日が上っていた。

腹が減っていたので、とりあえず宿に戻ってご飯を食べることにした。

食堂のおばちゃんに注文しようとして、なあ、アウイ。剣でもご飯って食えるのか？と、ふと思いついた疑問を口にする。

「食べれますよう？食事っていう形を通して、食材の魔力を吸収する感じですか。マスターの魔力をもらってれば、ご飯を食べる必要もないですけどね？」

なるほどね。俺がいなくても魔力の補給はできるわけか。

そんでもって、魔力が切れると具現化出来ずに、ただの剣としてしか使えなくなる……と。

ふむふむと頭のなかで整理しながら、おばちゃんに朝食のセットメニューを2つ注文する。

2人で食堂に来て、1人だけ食べるのもあれだしな。

「……あ」

「どおひたんでふか？まふたあ？」

俺の声に、サラダをむしゃむしゃ食べながらアウイが聞いてくる。

やべえ……金ねえや。今までルナに出してもらってたからなあ……

……。普通に頼んじやったよ……、どうしよ。

「あ、あのさ。アウイって今……金持ってる？」

「あー、なるほどお。大丈夫ですう。多少なら、昔ご主人様に貰ったおこづかいがありますよお。」

それって100年前のだよな？使えるのか……？

冷や汗をかきつつも、しっかりご飯はたいらげる俺なのだった。だって勿体ないジャンナイ！

まあ、結果から言つと、なんとかなつた。100年前の金貨だったが、むしろプレミア的なものが付いていたらしく、食堂のおじさんがコレクターだったというのも相まって、金貨1枚を出して、金貨5枚（食事代込み）が返ってくるという、摩訶不思議な現象が起こつたのだった。

いやあ、さすがの俺もたまげたね。

そうそう、この世界の通貨は、銅、銀、金、閃貨で成り立っている。

銅貨100枚で銀貨1枚、銀貨100枚で金貨1枚、金貨100枚で閃貨1枚となる。つまり、閃貨1枚が、銅貨1000000枚分と。

平均的な月収が銀貨50枚ほどだというので、食堂のおじさんは結構儲かっているようだ。

今は、アウイを剣に戻して、宿屋の部屋に帰る途中である。

てか、毎度毎度、女の子に金たかるってどうなのよ？俺……。

軽く自己嫌悪に陥りつつ、金を稼ぐ手段を考える俺なのだった。

「と、いうわけで、お金ちょうだい」

「ああ！？何ぬかしてんだクソガキ！ぶっ殺すぞ！！」

あのあと、俺はすぐに金を稼げる方法を思い付いた。

そう、貰っちゃえばいいのだ。裏路地にたむろしている、頭の悪そうな奴等に。

どうせ奴等が持っている金も、同じような方法で奪ったんだろうし。

まさに give and take！自然の摂理？俺天才！ひゃっほーっ

「まあまあ、お兄さん。おとなしく渡しとかなないと、色々大変な目にあっちゃうよ？」

「それはそれは。一体どんな目にあうのかしらね……？」

「そりゃあもう、えげつ……な……い……」

後ろからの声に返事をしようとして、一瞬思考が停止する。

アレ？キイタコトアルコエガスルヨ？

冷や汗を滝のようにかきながら、ギギギギという擬音が聞こえてきそうな首の動きで振り返ると、そこには

般若　もとい、女神の様な形相のルナ様がかがが

~~~~~

「……………まさ……………リシマ様！キリシマ様！！」

「ふあっ！？ふあい！？」

気が付くと、何故か闘技場にいた。何故か呼ばれていたので、焦って変な声を出してしまった。

あれ……………？俺なんでこんなところにいるんだ……………？つてか、今まで何してたんだっけ??？

「大丈夫ですか？体調がすぐれないのでしたら、棄権も可能ですが……………？」

「ううー？あー……………、いえ。だいじょぶですー」

心配してくれている審判さんに、軽く手を振って答える。

「がはははは！なんだボウズ！びびってんのか！？肝っ玉のちいせえ野郎だな！帰って母ちゃんのおっぱいでも吸ってるよ！」

指の骨をパキパキと鳴らしながら威圧してくる男。

……………なんか目の前で虫がほざいてるな。

「そ、それでは予選第2回戦を始めます！は、始めっ！」

俺の黒い空気に気付いたのか、審判さんが慌てて試合を始める。

「おらぁっ!」

掛け声と共に、大振りのパンチを繰り出す男。それを、軽く身を捻って躲す俺。

次々とパンチを打ってくるが、この程度の攻撃が当たるわけもなく、なんなく避け続ける。

「くそっ! ちょこまか動きやがって! 当たりやがれ!」

「当たれといわれて、当たってやるほど馬鹿じゃないんでね」

そんなことよりも、俺にとってはここにいる理由の方が、よっぽど問題なのだ。

もう少しで何か思い出せそうなの

「っ!?!?」

ゾクリとした感覚を覚え、慌ててそちらを振り向けば、観客席に座る1人の少女 ルナがいた。聖母の様な笑みを浮かべて。そして俺は悟った。『これは思い出してはいけないことなのだ』と。

瞬間、頭に衝撃が走り、1メートルほどふつとばされた。

「ぜえっ……ぜえっ……。やっと……当たりやがったか……」

男が、息も絶え絶えに言葉を紡ぐ。
俺は寝そべった状態から、バネの要領で飛び起きる。

「はあ……、めんどくせえな。とりあえず、とっとと終わらせるか」
首をコキコキならしながら、男に向かって歩いていく。

「じゃ、おやすみー」

「おごぶおっ!?!」

一瞬で男の目の前まで移動し、かるーくデコピンをすると、勢いよく闘技場のリングに後頭部を、ごんっ!と、ぶつける。

あつというまに気絶した男など目もくれず、俺はこの後に会うであろう、ルナ対策に頭を捻るのだった。

最近物忘れが激しくて……（後書き）

こ、こんな駄文ですが、ご意見・ご感想お待ちしております……ぐふ
つ。。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9119r/>

ファンタジー的な物語（魔法もあるよ！）

2011年11月2日15時07分発行